

1 老化のリアル

①かかりつけの医者から助言されたことがある。

持病で死ぬより骨折の方が怖いからね。つまずいて、骨折して、寝たきりになったら大変だから。

②この頃、左足の小指を何度もぶつける。椅子や、階段や、掃除機につまずく。家の中のあちこちでつまずく、角にぶつける。

数時間前に掃除機にぶつけたと思ったら、またぶつけた。「こんなところに置いたのは誰だ」といいたいところだが、ここに掃除機をおいたのはたしかわたしである。

③気をつけたからといって防げるわけではない。気をつけていても、ぶつけてしまう。左の下肢の感覚が鈍っているのか。それとも左足の感覚を脳が認知できないのか。頭と肉体が連携しないでバラバラに動いている。嫌な感じである。

④今まで歩くことに気を使ったことなどなかった。ごく自然に物との距離をとっていた。だが距離感が狂い始めている。歩くのが大変だなんて、考えただけでゾットする。こんな調子では、夏にも厚い靴下でも履かねばなるまい。

⑤老人の骨折の話はよく聞くが、他人事だと思っていた。しかし、笑いごとではない。悪化する一方で元に戻る見込みはないというのは気が滅入る。この痛みは単に肉体的なものではなく、精神的なものでもある。かといって、医者に行っても、どうなるわけでもなからう。「そんなことが気になるんですか。老化しただけですよ」と馬鹿にされそうである。

⑥こんな話に限らない。そういえば眼鏡をかけているのに、メガネがないないと騒いだり、あれほど几帳面に飲んでいて持病薬を飲むのを忘れる。この前は、チューブ入りの保湿剤で歯を磨きそうになって、愕然とした。このまま進むと、やがて目にマスクしたり、口にメガネをかけたりしかねない。そのうち頭

もオカシクなって…。オオ！ 考えるだけでもヤダヤダ。未来は暗い。
これが後期高齢者の実態である。

2 妻との楽しい会話！

①食後の食器洗いはわたしの役目である。

この頃よく皿を落として割ってしまう。そんなことが立て続けに2～3度あった。

「パパも歳をとったわね」。妻は口には出さないが、呆れているのが分かる。

以前、足に落として、怪我をしたことがある。そうなのは面倒である。

②わたしには、ビジネスで培った類まれなる交渉術がある。「あらまた割ったの」といわれる前に、機先を制して煙にまく。

古代ギリシャの哲人曰く。よく皿を洗う者はよく皿を割る。皿を洗わない者は皿を割ることはない。

③また、こういう手もある。

形あるものは必ず壊れる。それを否定するものは、諸行無常の法則を知らない者である。

④気分しだいでこんな風にいうときもある。

わたしが衰えたと嘆く必要はない。今日のわたしは明日のあなただ。あなたもわたしの後を追って、着実に老いてきている。

⑤今朝、久しぶりに茶碗を割ってしまった。一瞬、今日はどう言い訳しようかと考えていると、妻が機先を制して思いがけないことをいう。

明日、夫婦茶碗めおとちawanを買いにショッピングモールに行かない？

⑥予想外の出方に不意を突かれて、わたしはついうなずいてしまう。

妻はコロナを避けての巣ごもり生活にあきあきして、久しぶりに街に出るのが楽しげである。割った茶碗は1個なのに、なぜ2つ買うのか不明だが、それをいっては角が立つ。

⑦一事が万事こうである。だから、45年超の結婚生活で、およそ喧嘩をしたことがない。妻は天然なのか聡明なのか、容易に判断しがたい。ひょっとしたら、2つのゴールドブレンドかも・・・。

3 誰がための国葬か

①国葬の何が問題なのか？

国葬に反対する人々が60%に達するという(2022年9月19日付け日本経済新聞)。異常事態である。主な疑念は、以下の点にある。

- (1) 国葬の法的根拠はあいまいで、十分な審議もされていない。
- (2) 国葬の予算額を隠しているのではないか。公表額はごく1部ではないか。
- (3) 選挙のために安倍派は旧統一教会と手を結んでいたのではないか。その実態は如何。

②安倍体制の負の遺産

しかし、これらは表面的なことで、それ以外に安倍・菅政権は「負の遺産」を残した。ちょっと思いつくだけでも、将来の長い間にわたって影響する深刻な問題ばかりである。

- (1) 財政悪化と国債の乱発
- (2) 富裕層の優遇と貧富の格差拡大
- (3) 法の無視/軽視と脱法的手段の駆使
- (4) 北方四島返還政策の放棄

これらのどれ1つとっても、真の保守から逸脱する政策だった。

特に、プーチンとの交渉で、それまでの北方四島一括返還政策を独断的に放棄したのは、大きな禍根を残した。

③問答無用体質と霸道

だが最大の問題は、これらの諸問題の根底にあるモリ・カケ・サクラ（森友学園・加計学園・桜を見る会）的体質である。

安倍・菅政権は、法を捻じ曲げ、多くの犠牲者を出し、これだけ大きな問題を問答無用と隠し通した。民意を無視して霸道的政治を行った（備忘録「コロナとわたしと日本人」(13) 8 参照）。

世評とは異なり、安倍体制は保守の悪しき異端である。保守の王道を外れる鬼子である。

④首相の狙いは見え見えである

このようなさまざまな問題を抱えながら、首相が拙速に国葬を決めた理由は何か。

それは、自党内の権力争いの状況から明らかだろう。

党内最大派閥の安倍派に恩を売って、自らの権力固めを狙う、すこぶる政治的な思惑に違いない。

そのために、首相はモリ・カケ・サクラ問題を不問に付すなど、旧体制の暗部にふたをすることを厭わない。国葬はそのための絶好の演出である。

故人の慰安のためではない。首相の、首相による、首相のための国葬である。

⑤連合会長と野田元首相の言いわけ

そんな国葬の意味と狙いを知ってか知らずか、連合の芳野友子会長は、国葬に出席する意向だという。

報道によれば、「国葬の決定プロセスは、法的根拠は問題ではある」としながらも、弔意を示すことは分けて考えたという。「労働者を代表して責任を果たすべきだと考えた」ともいう。

野田佳彦元首相（旧民主党）も、国葬を決めたやり方を「拙速で独善的」批判しつつ、その一方で、「（野田）元首相が（安倍）元首相の葬儀に出ないのはわたしの人生観から外れる。

長い間お疲れさまでした、と花をたむけてお別れしたい」と語った。

⑥政府の思惑にはまった2人

2人ともただの私人ではない。連合のトップだから、最大野党の元首相だからこそ招待されたのである。

事々しく自らマスメディアに発表した時点で、2人の国葬参列は個人の行為から世俗の行為（政治的行為）に変質した。

国葬に参列する結果、連合会長も立憲民主党の最高顧問も国葬に賛成とのメッセージを世間に与え、政府のプロパガンダに利用された。2人は政府の思惑にまんまとはまった。

（注）国葬に参加することが、唯一の弔問ではない。個人的な心情や弔意を表す方法はさまざまである。

俳優の高倉健さんは、まがまがしい葬式を嫌った。真に故人を慰安するなら、健さんのように、人知れず毎年墓参を続ける表現もある。

画家の梅原龍三郎は、そもそも「死者は生者を煩わせるべきではない」といって、事々しい葬式を嫌った。

⑦政治は結果である

政治は結果である。国葬に参列するか、参列しないか、安倍体制を是認するか否定するか。このいずれかしかない。特に、2人のように政治にかかわる人間にとってはそうである。個人の内心の問題であれば何でも許されるというのは、問題のすり替えである。

苦渋の決断だろうと人生観によろうと、所詮は個人の思いに過ぎない。人生観や苦渋の決断に逃げてはならない。物事を突き詰めて考えない労働貴族と無邪気な元首相。彼らはファンタジーの世界に生きている。

⑧「無邪気な善人」の翼賛体制を問う

無邪気な善人が結果的に戦時下の翼賛体制を支持・補強したことを、映画監督だった伊丹万作はこう批判した。

新聞報道の愚劣さやラジオのばかばかしさ、はては町会、隣組、警防団、婦人会といったような民間の組織が、いかに熱心にかつ自発的に、だます側（注：支配層）に協力していたことか。

権力に対し庶民の迎合を批判したこの指摘は、現代のわれわれにも警鐘を鳴らしている。